

権藤 博氏 殿堂入り記念展示

2019年7月12日(金)、マイナビオールスターゲーム第1戦(東京ドーム)試合前のグラウンドにて、本年殿堂入りの立浪和義氏、権藤 博氏の野球殿堂入り表彰式が開催されました。この表彰式でお披露目された両氏のレリーフは、翌日より野球殿堂ホールにて公開しています。また、表彰式当日より同ホールにて「2019年野球殿堂入り特別展」を開催し、脇村春夫氏(元高野連会長、8月16日に甲子園球場にて表彰)を加えた3氏ゆかりの資料を多数展示しました(9月29日会期終了)。

権藤 博氏については1961年の35勝ウイニングボールや沢村賞、最優秀投手賞、新人王の各トロフィー、翌62年の30勝ウイニングボール、1962年ユニホーム等、現役時代の貴重な資料や、コーチ、監督時代の資料も展示し、その活躍ぶりを紹介しました。

権藤氏は佐賀県立鳥栖高校から社会人野球のブリヂストンタイヤを経て、1961

年に中日ドラゴンズに入団。4月9日の巨人との開幕第2戦に先発し、4-1で完投勝利を挙げました。この試合、先頭打者の国松松選手に三塁前にバントを転がされます。同年のオールスター明けの新聞紙面でこのシーンを振り返り、「僕は必死に食い止めた。あれが僕の運命を決定したといえるでしょう。あのドラッグ・バントを成功させられていたら、今日の僕の成功はなかったかも知れません」と、プロ入り最初のアウトを「一番印象に残った」と語っています。なお、殿堂入り表彰式の挨拶では、その直後に迎えた3番長嶋茂雄選手に打たれた二塁打について「これが天下の長嶋か、と。それが私の野球人生の始まりでした」と語られました。もし、国松選手が出塁していたら、初登板の初回というプレッシャーのかかる状況で先制点を奪われていたかも知れませんか。

この年、権藤投手は69試合に登板、2リーグ制以降では現在も最多となる429.1

回を投げ、35勝、防御率1.70、310奪三振を記録。最多勝利、最優秀防御率、最多奪三振を獲得し、沢村賞を受賞、最優秀新人にも選ばれる大活躍を見せました。なお、パ・リーグでも西鉄の稲尾和久投手が78試合に登板、404回を投げ、42勝、防御率1.69、353奪三振を記録。1961年は九州出身の両右腕が空前絶後の活躍を見せたシーズンとなりました。

公益財団法人 野球殿堂博物館
学芸員 関口貴広

